

民族観光の発展と人々の反応：サラワクのビダユ集落を事例として

吉岡 玲*・増田 美砂**

Development of Ethnic Tourism and the People's Perceptions:
A Case of a Bidayuh Settlement in Sarawak, Malaysia

Rei YOSHIOKA* and Misa MASUDA**

目 次

1	はじめに	124
1.1	発展途上国における観光開発をめぐる問題	124
1.2	研究課題	126
2	サラワクにおける民族観光	126
2.1	観光産業の拡大	126
2.2	サラワクにおける民族観光	128
3	地域の概況および調査方法	129
3.1	A集落の概況.....	129
3.2	調査方法	131
3.3	A集落における観光開発と観光客数の変化	131
4	観光客からみたA集落観光	132
4.1	観光客の特徴	132
4.2	観光の目的と行動	135
4.3	観光客によるA集落の評価	135
5	A集落の住民と観光産業とのかかわり	138
5.1	世帯の特徴	138
5.2	A集落の就労形態と観光	138
5.3	観光開発に対する住民の意識	139
6	考察	141
	謝辞	143

* 筑波大学大学院生命環境科学研究科環境科学専攻

** 筑波大学大学院生命環境科学研究科持続環境学専攻

引用文献	143
Summary	145

1 はじめに

1.1 発展途上国における観光開発をめぐる問題

観光産業は、世界経済において最速の伸びを見せている部門のひとつであり、国際観光客数は1950年から2005年の間に2500万人から8億人以上に増加した（WTO, 2010）。また1970年に世界観光機構（World Tourism Organization, WTO）が設立され、2003年には国連の専門機関となり、2005年に略称をUNWTOとした（本稿ではWTOと表す）。

国際観光客の増加は、外貨収入をもたらすだけでなく、社会基盤など関連部門への波及効果が見込まれる。さらに自然保護や貧困削減にも資すると期待されている（WTO, 2002; WTO, 2006）。本研究でとりあげるサラワクでも、政府主導による観光誘致が行われている。

Smith（1989）は、ビジネスなど他の旅行目的と峻別するのは難しいとことわった上で、「観光（tourism）＝余暇の時間＋可処分所得＋動機（positive local sanctions）」と定義している。これは観光を行う主体の側からみた式であり、観光客の成立条件とも換言できる。

一方河村（2000）は、観光という商品を支える3要素として、資源、施設、およびサービスをあげている。そこでSmith（1989）の民族観光、文化観光、歴史観光、環境観光およびレクリエーション観光という観光形態の区分に対応する資源を、Smithの記述の中から抽出すると、表-1のようになる。

表-1 観光形態別にみた観光資源（Smith（1989）をもとに作成）

観光形態	観光資源
レクリエーション	（「そこ」にいたいと思うよう仕向けられる）ビーチ、スキー場、ゴルフ場など
歴史	寺院や遺跡などの歴史的遺産
文化	（古き良きライフスタイルの痕跡としての）食事、衣服、手工芸品、祭りなど
民族	（エキゾチックな）人々、生活、文化、住居、手工芸品など
環境	（しばしば民族観光に付随する）僻地の自然環境、人と自然の相互作用

観光開発は、必ずしも多大の初期投資や高度な技術を要しないため、発展途上国における経済開発の手段として有望である。人為的に創出された閉鎖空間に、資源・施設・サービスの3要素を包含するレクリエーション観光は、歴史観光のように所与の条件に規定されず、より普遍的に成立しうる観光形態である。しかし発展途上国では、土地と人にかかわるコストが低い反面、マツリズムへと発展させるには、道路や上下水道などの基盤整備に対する政策支援が不可欠と

なる (Wood, 1997)。その結果、外資や援助への依存や、利潤の分配におけるリーケージが生じるだけでなく、費用負担なしに景観等を付加価値にとりこむといったフリーライド、施設外における環境負荷などが問題視されている (Nash, 1989; 1996; 稲垣, 2001; 高寺, 2004; Chambers 2010など)。

それでは、発展途上国固有の自然環境や文化を観光資源化する際には、どのような問題が指摘されているのだろうか。

Graburn (1989) は、「ケ (profane)」の労働に対して、観光は「ハレ (sacred)」の行為であり、環境観光でハレの感動を引き出す重要な要素に他者、すなわち他の観光客の不在があるとす。しかし人との接触に欠く日々には退屈という陥穽があり、Wood (1997) のいう「異質性 (otherness)」を伴う民族文化を組み合わせることによってハレの感動を維持しつつ退屈を回避することができる。Smith (1989) が、環境観光はしばしば民族観光に付随すると述べる所以である。

民族観光における問題について、Smith (1989) は「ホスト／ゲスト」の概念を用い、単独あるいは小集団で行動するゲストはエリートであり、現地との同化性にすぐれているが、マスツーリストは観光の現場に対して先進国と同じ利便性を要求すると述べている。すなわち、観光の規模拡大は民族観光をレクリエーション観光へと変容させ、ホスト側は負荷を回避する上で、①観光の拒否や制限、あるいは②開発計画に対する積極的な位置づけのどちらかを選択せざるをえなくなる。その②の方向性についてWTOは、「参加」と「分配」をキーワードに類型化している (表-2)。ここで理想とされるのは、コミュニティが実質的に関与し、計画や経営に携わり、利益の主要な部分がコミュニティに還元される「コミュニティに基盤をおく観光 (Community Based Tourism, CBT)」である。

表-2 コミュニティー観光における参加と分配 (Xu et al. (2009) をもとに作成)

		決定プロセスにおける参加	
		あり	なし
利益の分配	あり	コミュニティは観光開発の意志決定だけでなく、観光開発をめぐる利益の分配方法や構成員の関与のあり方を含めた経営手法に対して合意を有する。決定には推進だけでなく、コミュニティのキャパシティーに応じた制御も含まれる。	開発計画の中には、補償としての対価をコミュニティに支払うものもあるが、コミュニティが開発主体と対等な立場で交渉することは難しい。あるいは雇用やサブビジネスというかたちで分配を受けることもある。
	なし	トップダウン型の開発計画において生じる。コミュニティは開発の打診を受けても、結果的に選択されないこともある。	コミュニティがもつ観光資源に対する権利は無視され、開発計画から疎外される。

一方でXu et al. (2009) は、コミュニティという単位を構成する人々の多様性が議論されることは少ないし、ある時点で捉えたCBTが成功しているようにみえても持続性が担保されているとは限らないと指摘する。また観光に限らず、地域のキャパシティーを超えた開発課題に対しては、行政の関与も必要であるとしている。

1.2 研究課題

サラワクは熱帯雨林帯に位置し、さまざまな民族集団によって社会が構成されている。民族観光と環境観光が結びついたかたちで成立しうる条件を備えているといえよう。

サラワクの民族観光についてYea (2002) は、人口規模において最大の民族集団であるイバンのバタンアイにある集落を事例に、ヘッドハンターやロングハウスといった言説からゲストが抱く期待とホストの生活には落差があり、ゲストを満足させるために外部者が文化を演出したと指摘している。加藤ら (2004) は、少数民族のケラビットが居住するバリオを事例に、奥地であるがゆえに成り立つ観光の実態を明らかにした。そこでは交通手段の制約がゲストをエリートに限定し、社会や環境に対する負荷の低い観光を実現していたが、一方でエリート観光は地域の経済開発にさして貢献せず、地域が直面する若年層の流出問題の解決とはなりえていなかった。

バタンアイの事例における問題は、表-2における利益の分配はあっても決定プロセスへの参加に欠くことに起因すると考えられる。一方バリオでは、CBTに区分しうる観光開発がなされていたが、奥地という制約がなくなったときに異質性を保ちうるかという課題だけでなく、低負荷型のエリートツーリズムであるがゆえの低い経済効果というディレンマも示唆していた。そこで本研究では、まずサラワクにおける観光形態を概観した上で、民族観光の事例をもとに、エリートツーリズムのもつ低投入－低産出ゆえの限界を克服できるかどうか、そのときの条件は何であるのかを、ホストとゲスト双方の側からみた評価をもとに検討した。

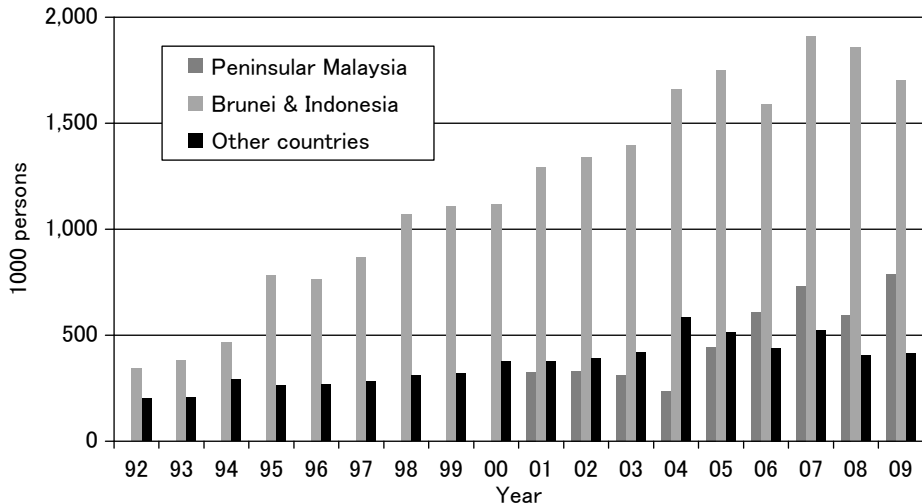
2 サラワクにおける民族観光

2.1 観光産業の拡大

1963年に半島マレーシアを訪れた観光客は、2万7千人にすぎなかった (Kahn, 1997)。1972年に通商産業省の下に観光開発公社 (Tourist Development Corporation Malaysia, TDCM) が設立され、1987年の文化・芸術・観光省設立とともにTDCMはマレーシア観光振興局 (Malaysia Tourism Promotion Board, MTPB) となり、政府による観光誘致が本格化した。Visit Malaysia Yearのキャンペーンを行った1990年の観光収入は対前年比60.5%増、Visit Malaysia Year IIキャンペーンを行った1994年には63.8%の増加をみた。2009年の観光客数は2,360万人に達し、順調な成長を遂げている (Hamzah, 2004; MTPB, 2010a)。今後も東アジア・太平洋域を訪れる国際観光客は世界平均を上回った伸び率で推移し、2020年の順位は中国 (香港含む)、タイ、インドネシアとなり、マレーシアはインドネシアに比肩すると予測されている (WTO, 2001)。

サラワクの観光行政は観光・遺産省 (Ministry of Tourism and Heritage, MinTH) が担ってお

り、その下にサラワク観光局（Sarawak Tourism Board, STB）が組織され、交通機関や宿泊施設、観光地、特産品などの広報を行っている。サラワクを訪れる観光客数の推移をみると、陸路で往来できるブルネイおよびインドネシア人がそれぞれ1、2位を占めていた。そこでこの2カ国を除く他の外国人の訪問者数をみると、1992年の年間20.2万人から、ピークの2004年には58.3万人に増加した。半島マレーシアからの来訪者数も、MinTHのウェブサイトとその内訳が載るようになった2001年の32.7万人から、ピークの2009年には78.9万人に増加した（図－1）。



図－1 サラワクを訪れた旅客者の推移（MinTH, 2010）。2000年以前の半島マレーシア出身の訪問者数は不明。

2003年に東アジアで流行した重症急性呼吸器症候群（SARS）の影響で、世界的に旅客数が減少したにもかかわらず、サラワクを訪れた外国人の数が2004年にピークに達したのは、マレーシア政府が渡航の安全性をアピールしたこと（MTPB, 2010b）に加え、2003年のVisit Sarawak Yearキャンペーンが功を奏したとも考えられる。その後は増減しつつも低下し、リーマンショックによって2001年水準近くまで落ち込んだ。しかし半島マレーシアからの来訪者はむしろ増加傾向にあり、サラワクを訪れる観光客の多様化を示唆している（図－2）。2000年までの統計は複数の国をグループ化しているため、一概に比較できないだけでなく、観光ビザで入国した人々が観光客であるとは限らないが、国別にみると、連合王国、オーストラリア、米国、カナダの順位が低下傾向にあるのに対し、中国やインドが上昇している（MinTH, 2010）。半島マレーシアでも同様に、中国、インドおよびアラブ諸国が新たな観光客の供給源として注目されている（Hamzah, 2004）。

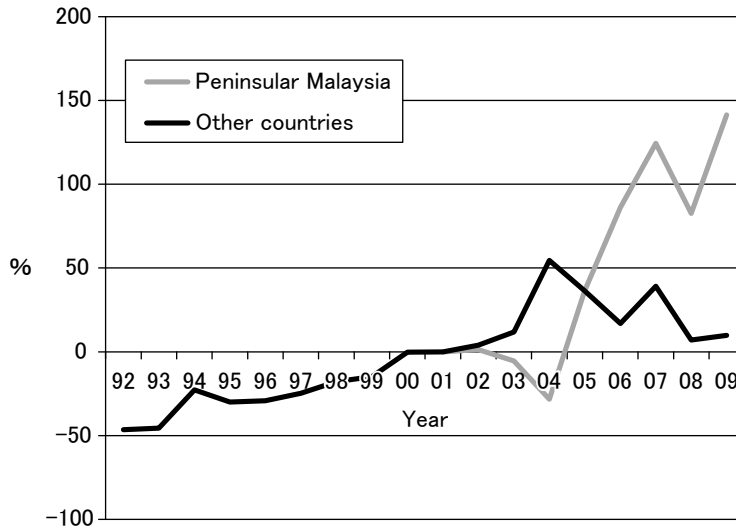


図-2 2001年を基準にした、サラワク訪問者の増加率 (MinTH, 2010)。マレーシア以外の総訪問者数から、ブルネイおよびインドネシアを除いたものをother countriesとした。

2.2 サラワクにおける民族観光

STBのウェブサイトでは、サラワクの魅力を自然から近代都市まで含む多様性にあり、サラワクを構成する28 (サラワク政府のポータルサイトでは27) の民族集団は今なお文化遺産を維持していると紹介している (STB, 2010a; Sarawak Government, 2010)。そのひとつがロングハウスとよばれる住居であり、ボルネオ島のインドネシア側では例外的にしか残っていない居住形態が、サラワクでは広く維持されている。2000年センサスによると、人口において最大の集団はイバン (29.1%) であり、次いで中国系 (25.9%)、マレー (22.3%)、ビダユ (8.0%) となり、人口密度は $16.2 \text{人} \cdot \text{km}^{-1}$ と、東南アジアの他地域に較べて低い (State Planning Unit, 2010)。州面積の66.7%が森林に区分されており、15の国立公園をはじめ保護区も多い (Forest Department Sarawak, 2010)。

STBのウェブサイトに掲載されているパッケージツアーを手がかりにサラワクの観光資源をみると、77件 (サバ州を主たる訪問地とするもの4件と内容が完全にオプションである1件を除く) のうち、17件は国立公園をはじめとする保護区を主たる目的地とするものであり、57件は州都クチンを足場に周辺観光地を回りショッピングをするか、近郊のリゾート施設を利用するものであった。残り3件がロングハウスにおけるホームステイを掲げており、2件がイバン、1件がビダユのロングハウスが訪問地であった。またクチン観光パッケージのうち、6件がロングハウスへの立ち寄りをコースに含んでおり、うち5件はビダユ、1件はイバンのロングハウスであった。計3件で訪問地にあがっていたイバンのロングハウスは3カ所に分散していたが、ビダユに関わる6件はすべてパダワンのA集落を訪問先にしていた (STB, 2010b)。本研究では、このA集落を事例にとりあげた。

3 地域の概況および調査方法

3.1 A集落の概況

サラワク州の地方行政はまず省に分かれ、その下に地区 (District) あるいは区 (Sub-district) があり、それぞれに知事 (Resident), 担当官 (District Officer, D.O.) あるいは行政官 (Sarawak Administrative Officer, S.A.O.) が任命される。

ビダユは、かつて山間部に居住し、沿岸部に住むイバンが海ダヤクと称されたのに対し、陸ダヤクとも呼ばれた。またイバンとともにヘッドハンティングで名を馳せていたが、20世紀初頭にその慣習は消滅した (Geddes, 1954)。ビダユが居住していたサラワク西端部には、州都クチンやスリアンなどの都市が発達し、ビダユのライフスタイルにおいても都市化が進行した (Mamit, 2003)。しかしビダユ社会における婚姻や土地など、慣習法のもとにある事項については、他の民族集団と同様、トゥマンゴン (*temenggong*) と称される長のもと、ビダユ居住地区あるいは区に配置される4名のプマンチャ (*pemanca*)、およびその下に位置するブンフル (*penghulu*) によって統治されている。A集落のあるパダワン区のビダユ集落は3グループに分けられ、それぞれにブンフルが配置されている。これらの長は、かつては世襲制をとり終身その位にあったが、近年は地区あるいは区に設けられた議会が任命する政治ポストとなりつつある¹。

先行研究で扱っていたバタンアイやバリオと同様、ビダユのA集落もインドネシアとの国境付近の山間部に位置するが、州都クチンとの距離は約60kmにすぎず、舗装道路が通じており、集落の入り口まで車で乗り入れることができる (図-3)。しかし集落に通ずる公共交通機関がないため、自動車やバイクを保有しない住民は、一部の住民が私的に運行している乗り合い自動車を利用して、パダワンで日用品を購入する。観光客はツアーバス、タクシー、あるいはレンタカーを利用して来訪していた。電力は供給されていたが、上水は近くの山の水源から引いたパイプで供給され、晴天が続くとしばしば渇水した。電話回線はなく、郵便物も届きにくいいため、携帯電話が少しずつ普及していた。

他のビダユ集落の規模が数10世帯であるのに比べ、A集落は人口規模が大きい²。もともとA集落は、アナ (Annah) 一族の頂点に立ち、広大な領土を有していた。その名残で、集落構成員が慣習的に占有する土地は、徒歩で2時間ほどかかる区域まで広がり、家族が受け継いでいる区域内であれば自由に焼畑用地を選択することができる。しかし20種以上あるとされるタケの中で、ブルナイ (*brunai*) とよばれる種の群落だけは、自生しているにもかかわらず明確な所有権が確立し、ビダユ建築の特徴である前庭 (*tanju*) をはじめとする住宅部材や道具に用いられている (写真-1)。ビダユは伝統的にイバンのような長大なロングハウスを建設せず、今日ではロングハウス自体がほぼ消滅しているが、その中でA集落は唯一伝統的な外観を残している。またヘッドハンティング時代に集められた首級を保管する聖所 (*panggah*) も再建され、頭骨が展示されている。

1 2009年8月10日、ブンフル・アナ-テピアに対する聞き取り。

2 ブンフル・アナ-テピア提供資料。

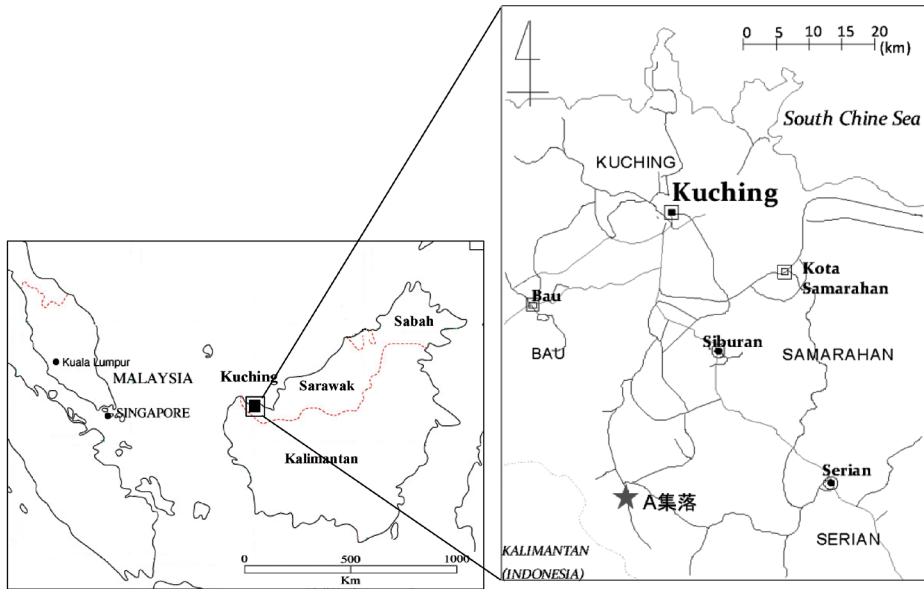


図-3 A集落の位置 (Sarawak Mapより作成)。



写真-1 ビダユの家屋を特徴付けるタケのtanju。左に見える軒の奥がロングハウスの居住区で正面は独立家屋 (2009年8月, 著者撮影)。

3.2 調査方法

A集落は4つの地区に分かれているが、うちひとつは集落に至る道路沿いに点在する独立家屋からなるため、調査対象から除外した。残り3地区のうち、ロングハウスが発達しているのは1地区であり、観光客が訪れるのも主にこの地区である。他は断続的に家屋が連なっており、観光との関わりは弱い。

これら3地区を対象とし、集落長 (*ketua kaum*) に対する聞き取りをもとに世帯名簿を作成したところ111世帯あった。集落内のキーインフォーマント情報をもとに、回答が困難な高齢世帯や長期的な不在世帯を除くと、87世帯となった。そこから地区ごとに約75% (計61世帯) を無作為抽出し、統一した調査票を用いた訪問面接調査を行ったが、3世帯は調査を拒否、3世帯は不在であり、55世帯から回答を得ることができた。これらについては最年長者を世帯主とし、18歳未満と75歳以上を除いた122名の世帯構成員を個人ベースの分析対象とした。調査票の内容は世帯の属性と観光に対する意見に関する設問で、それにしたがって英語でインタビューし、英語を話さない住民には英語—マレー語、または英語—ビダユ語の通訳を用いた。

同時に、2009年8月にA集落を訪れた観光客のうち、先着100グループに対して、英語による自記式のアンケート調査を行った。回答者の属性、観光形態、およびA集落の評価に関する設問に対し、予備調査をもとに用意した回答から選択してもらった。重複を避けるため、集団に対しては代表1名に記入してもらった。したがってアンケート結果は、グループとしての属性や行動と、回答者個人の属性や見解を分けて処理した。その他、A集落観光を斡旋している旅行会社5社においても聞き取りを行った。

以上の調査を2009年7月～9月に実施した。

3.3 A集落における観光開発と観光客数の変化

A集落で観光業に携わる住民の話によると、1980年当時、まだロングハウスを維持していたA集落には少しずつ観光客が来るようになった。そこで住民自ら観光資源の整備をはじめ、1989年にはインフォメーションセンター、1990年には公共トイレを建設した。同時に集落の入り口にあるインフォメーションセンターで入村料を徴収するようになり、当初は大人5リンギット、学生3リンギットとした (1990年の平均レートは1リンギット=0.37米ドル)。

1997年には地区政府の財政支援により、高床式住居や前庭の支柱を耐久性の高いテツボク (*Eusideroxylon zwageri*) に変える工事が行われた。1999年にはビダユ唯一のロングハウスとしてMinTH (当時はMinistry of Urban Development and Tourism, MUDT) の認定を受け、2003年には一部の住民がホームステイプログラムを始めた。

サラワクにおける村落開発は、村落開発委員会 (Jawatan Kuasa Keselamatan dan Kemajuan Kampung, JKKK) が担っている。A集落でもJKKKが観光開発を担い、毎年観光客数と入村料収入をMUDTに報告するとともに、入村料を住民全体に還元していた。しかし2009年の委員長交替以降、観光開発に関する会合は開かれなくなり、観光客からの苦情やトラブルを処理する担

当者が1人いるだけであり、その現状を批判する住民もいた³。

一方で、住民による観光活動は活況を呈していた。2009年にホームステイを行っていたのは10世帯であったが、政府に申請中の世帯もあり、今後さらに増えることが予想される。その他、集落内外のガイドツアーや、自らの前庭や空き家の軒先を借りての土産物販売、農産物販売、伝統舞踊の披露などの活動も行われていた。近くの川に温泉があるため、隣接する土地を慣習的に占有している住民は、一帯を柵で囲い込み、歩道を整備するとともに入場料の徴収を始めたが、そうした個人的な資源の独占に対する批難もきかれなかった。

A集落で本格的な観光開発が始まってから約10年が経過したが、観光客数は、SARSの流行した2003年に883人に落ち込んだ以外、増加傾向にある。2007年に入村料を一律8リンギット（2007年の平均レートは1リンギット=0.30米ドル）に値上げしたが、観光客数に対して影響はみられなかった（図-4）。

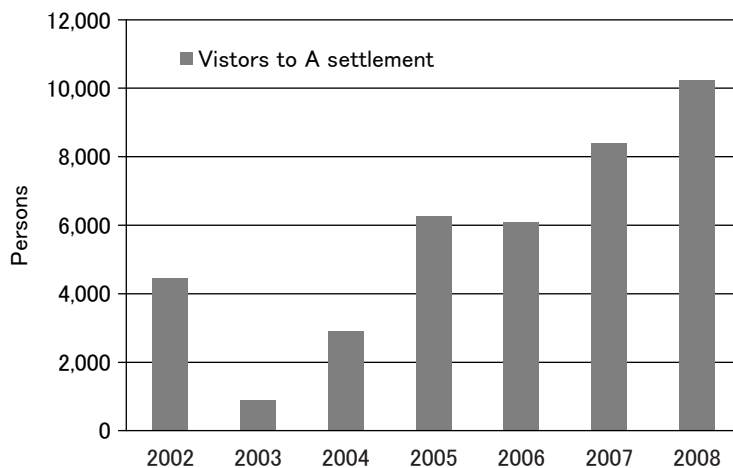


図-4 A集落を訪れた観光客数（MinTH提供資料）。

A集落の住民のかかわる観光業は、実は集落内で行われている諸活動だけでなく、徒歩約20分の場所にゲートがあり、広大な敷地を有するボルネオハイランドリゾートにおける雇用も含まれていた。これら2つは正反対の特徴を有しており、ボルネオハイランドは要人がヘリコプターでのりつけることもある高級欧風リゾートなのに対し、A集落の施設やサービスはいわば住民の手づくりである。

4 観光客からみたA集落観光

4.1 観光客の特徴

アンケート調査を行った半月余りの期間だけみても、A集落には世界各地から観光客が訪れて

3 2009年8月14日、前JKKK委員T氏に対する聞き取り。

いた。回収した100部のうち、単独旅行の回答者は3名にすぎず、残りは家族か友人の集団であった。以下、それらすべてを観光グループと記す。

ヨーロッパから訪れたグループが最多の56.0%を占め、国別にみるとイタリア、英国、フランス、ドイツ、オランダの順に多かった。アジアからの観光グループは、シンガポール、インド、中国の順に多く、単独で旅行している日本人1名を加えた4カ国であった。その他、オーストラリア、ニュージーランド、米国、カナダ、ジンバブエからもA集落を訪れ、計22カ国にのぼった(図-5)。マレーシア国内から訪れているグループも21.0%を占めており、マレーシアやサラワクの観光統計の示唆するところと同様、国際観光をめぐる人の動きは、かつての先進国から発展途上国という一方向性から、国内や発展途上国間も含めた多極化に向かっていることが伺えた。

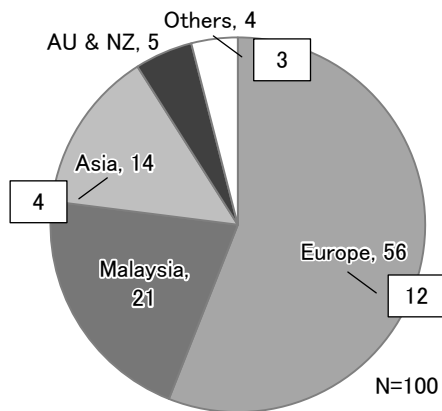


図-5 A集落を訪れた観光グループの国籍 (2009年8月6日～24日)。AUはオーストラリア、NZはニュージーランド。枠内は国・地域の数。

これらの観光グループの旅行計画は、サラワクのみを訪れる旅行計画から、マレーシア全体、さらに複数の国を訪問する計画まで多岐にわたっていたが、サラワクのみを訪れる予定のグループの平均旅行日数が5.5日であるのに対し、他国を含む計画を立てているグループは30.3日と大きい開きがあった。後者から、7ヶ月の予定で世界旅行を行っている2人連れのスロヴェキア人を除いても、平均旅行日数は24.9日となり、サラワク以外のマレーシア(サバあるいは半島マレーシア)も回ったグループの平均日数(19.4日)より長かった。北米やヨーロッパの遠隔地から訪れたグループに、複数国を回る長期旅行を行う傾向が認められた。サラワクのみを訪問していたのはマレーシアを含むアジアのグループに多く、81.0%にのぼっていた(表-3)。

ヨーロッパからのグループは滞在期間が最長7ヶ月、最短3日と分散が大きく、中央値は19日であった。アジアのグループから、1ヶ月の予定で旅行している日本人という外れ値を除くと、平均旅行日数は7.2日となり、ヨーロッパの半分に満たなかった。北米やオーストラリアの結果と合わせると、先進国から訪れた旅行者は相対的に少規模で長期間旅行し、発展途上国の旅行者は大勢で短期間の旅行を行うという傾向がうかがえた。

表-3 A集落を訪れた観光グループの旅行計画 (2009年8月6日~24日)

	グループ数 計	サラワクのみ		他国含む	
		数 (%)	平均日数	数 (%)	平均日数
ヨーロッパ	56	7 (12.5)	7.7	20 (35.7)	35.5
オーストラリア・NZ	5	1 (20.0)	16.0	1 -	15.0
米国・カナダ	3	- -	-	3 -	22.7
アフリカ	1	- -	-	1 -	7.0
アジア (マレーシア除く)	14	9 (64.3)	5.9	1 (7.1)	4.0
マレーシア	21	17 (81.0)	3.8	1 (4.8)	15.0
計	100	34 (34.0)	5.5	27 (27.0)	30.3

その他の39グループは、サラワクと半島マレーシアあるいはサバを組み合わせていた。

ところがA集落における滞在日数には大きな差はなく、日帰りするグループが多かった。全体では86グループが日帰りであった。訪問頻度については79グループが初めてであり、近くから訪れたグループが再訪する傾向にあった (表-4)。

次にアンケート回答者個人の属性をみると、回答者の58%が女性であった。年齢は20代が36%ともっとも多く、年齢階層が上がるほど、人数は減少した。10代の回答者で家族とともに訪れた3名を除いた97名についてみると、最終学歴は大卒が最も多く60名 (61.9%) であり、次いで大学院修了の17 (17.5%) となり、両者合わせて8割近くに上った。職業は、政府職員、会社員、自営業、教員が各29名の同数であり、次いで研究者や建築家などの専門職19名であった。

表-4 A集落を訪れた観光グループの特徴 (2009年8月6日~24日)

国籍	グループ		平均 旅行日数	A集落における	
	数	平均人数		平均日数	頻度
ヨーロッパ	56	2.8	25.1	1.3	1.2
オーストラリア・NZ	5	3.4	13.6	1.0	1.3*
米国・カナダ	3	2.7	22.7	1.0	1.0
アフリカ	1	2.0	7.0	1.0	1.0
アジア (マレーシア除く)	14	5.4	8.8	1.4	1.6
マレーシア	21	8.0	4.3	1.1	2.5*
計	100	4.3	17.6	1.3	1.5

* A集落の訪問頻度については、「多数」という回答 (オセアニアに1, マレーシアに4グループ) を除いた。後者はサラワク在住者 (3グループ) を含む。

4.2 観光の目的と行動

情報の入手源は、旅行代理店 (31)、ガイドブック (30)、インターネット (16) の順に多かった。A集落の観光ガイドは、ロンリー・プラネットや旅行社のウェブサイトにも載っており、提携しているホームステイ先がそれぞれのサイトで紹介されているが、ホームステイならびに土産物販売を営むA氏夫妻は、独自に紹介サイトを開設していた。A集落には電話もインターネット回線も届いていないが、携帯電話による予約は可能である。

公共交通手段のないA集落への移動手段については、55グループがパッケージツアーを利用していた。用いた旅行社は23以上 (名称を記載していない回答が8) に上り、STBのウェブサイトで紹介されているツアーは一部にすぎなかった。うち3グループはA集落の住人が手配したツアーで訪れていた。

ツアーを利用した理由として、パッケージが魅力的であること (45.6%)、個人旅行に比して簡便であること (38.2%) が多かった (複数回答)。ツアーを利用しないグループは、タクシー、レンタカー、友人の車などでA集落を訪れた。パッケージツアーの大半はクチンを起点に、道中にあるオランウータンのリハビリセンターとA集落を組み合わせており、2つ合わせると日帰りで自然と文化が体験できるようになっている。実際、84名の回答者がA集落を訪れる目的をビダユ文化に触れることとしており、自然に触れることをあげた回答者は43名であった (複数回答)。ツアー利用 (55グループ) と個人旅行 (45グループ) を比較すると、文化という回答には差がなかったが、自然やアドベンチャーをあげたものは、前者がそれぞれ38.2%および12.7%であるのに対し、後者は48.9%および24.4%と高かった。

ツアーガイドに対しては、「親切」(63.6%)、「情報が多い」(54.5%)、「英語を話す」(54.5%) と評価され、何らかの肯定的な評価をしたものは88.3%にのぼった (複数回答)。否定的な評価を行ったものは3.6%にすぎなかった。

次にA集落滞在中に行った観光活動を、①ロングハウス見学、②伝統ダンス見学、③土産物の購買、④伝統的な食事、⑤温泉訪問、⑥滝訪問、⑦トレッキングに区分し、日帰り客 (83グループ) と宿泊客 (17グループ) を比較すると、当然のことながら日帰り客の平均活動数が1.5であるのに対し、宿泊客は3.9であった。ロングハウス見学と買い物に両者の差はみられなかったが、ロングハウス外に出る活動 (⑤～⑥) や夜間行われる活動 (②) に差がみられた (図-6)。集落で食事をする日帰り客が少ないのは、飲食できる場所が、温泉にある小さな休憩所しかないことによる。また宿泊しながら④を選択しなかった回答者が11名 (64.7%) に上ったのは、宿で提供された食事が伝統食ではなかったことによると考えられる。

4.3 観光客によるA集落の評価

A集落の印象に関して、肯定群と否定群にそれぞれ5つの項目を設け、「その他 (自由記述)」を含め選択するという質問を設けた。その回答をみると、何らかの肯定的な印象を選んだ回答者は96にのぼった。残り4回答者のうち、3名は否定的な項目のみを選択し、1名は無回答であった。一方、何らかの否定的な印象を選択したのは45名であった。選んだ項目の数を平均しても、

肯定は1.87項目、否定は0.52項目となり、A集落に対しては全体に好印象をもったといえよう。「その他」で自由記述を行ったのは、価格がやや高いと書いた1名のみであった。

ツアー利用グループの回答者（55名）と個人旅行の回答者（45名）を比較すると、住民のホスピタリティーに好感をもった回答者は個人旅行グループに多かった。肯定/否定を選んだ項目数の比をみると、ツアー利用者は1.57/0.45、個人旅行者は2.33/0.63となり、個人旅行者はより鋭く観察していることをうかがわせる結果になった。

同様の比較を日帰りグループ（83名）と宿泊グループ（17名）で行うと、差はより顕著になった（図-7）。宿泊客は全員が肯定的な感想をもち、否定的な項目を選択したものは35.3%にすぎなかった。肯定/否定の平均項目数を日帰り客、宿泊客別にみると、それぞれ1.72/0.56、2.59/0.35となった。宿泊客全員がホスピタリティーを評価している点からも、時間をかけた方が印象がよくなることがうかがえた。

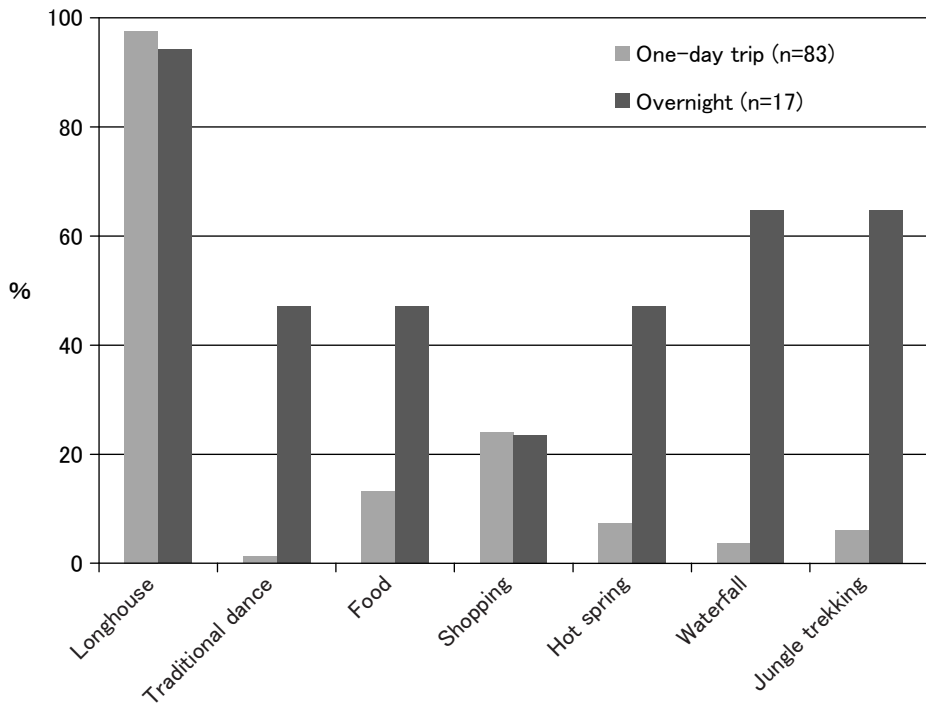


図-6 日帰りか宿泊かの区別にみた、A集落を訪れた観光グループの活動（2009年8月6日～24日）。複数回答。

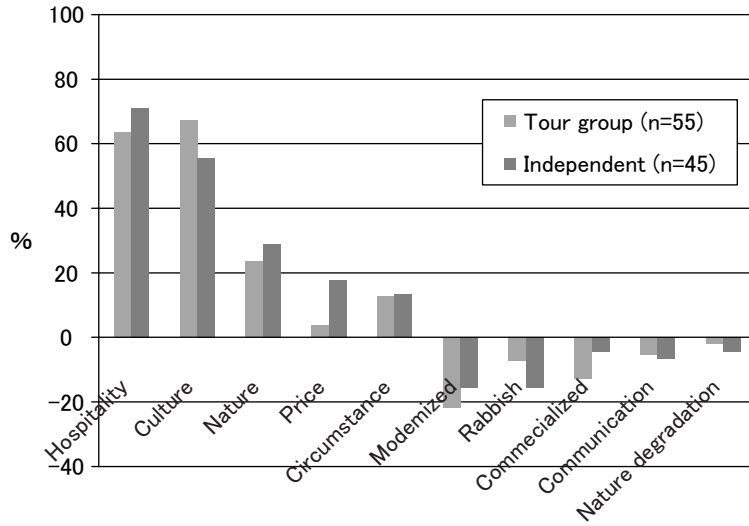


図-7a パッケージツアー利用グループと個人旅行グループ別にみた、アンケート回答者のA集落に対する感想（複数回答）。肯定的な回答群をプラス、否定的な回答群をマイナスで示した。

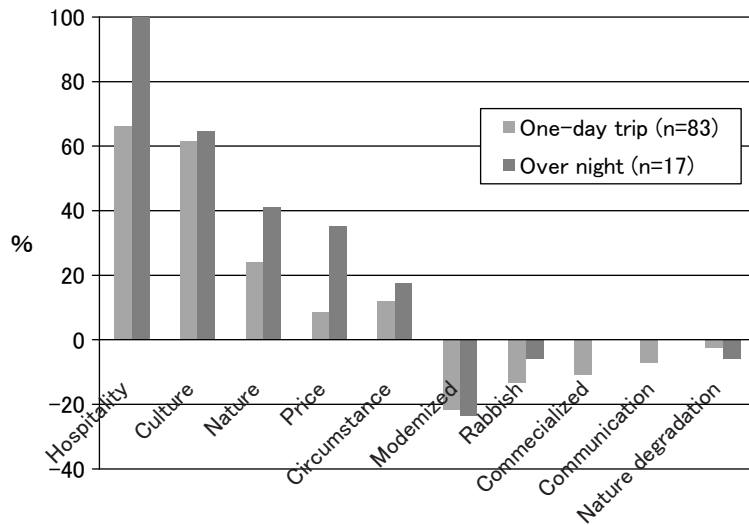


図-7b 日帰りグループと宿泊グループ別にみた、アンケート回答者のA集落に対する感想（複数回答）。肯定的な回答群をプラス、否定的な回答群をマイナスで示した。

5 A集落の住民と観光産業とのかかわり

5.1 世帯の特徴

A集落3地区の111世帯のうち、24世帯(21.6%)は不在や高齢により、インタビューできない状態であった。残り81世帯から選んだ61世帯のうち3世帯もまた長期的に不在であることがわかった。単純計算では、約4分の1が都市部に拠点を移していることになる。ロングハウスの空き家のひとつは、観光客のために内部を公開していた。

高齢になるほど生年が不確かになるため、インタビューできた55世帯の世帯主平均年齢を10歳きざみの階層に分けてみると、60歳以上層が27世帯と半分近くを占め、平均年齢も60歳を超えた。ただしA集落の居住形態は、独居から核家族、拡大家族、祖父母世代と孫世帯の同居など多様であり、年齢階層が高くなるほど、すなわちサンプル数が多い階層ほど分散も大きくなった(図-8)。60歳以上層のうち約半数の14世帯は、世帯主より下の世代と同居していたが、単身世帯も7世帯(うち5世帯は女性)あった。

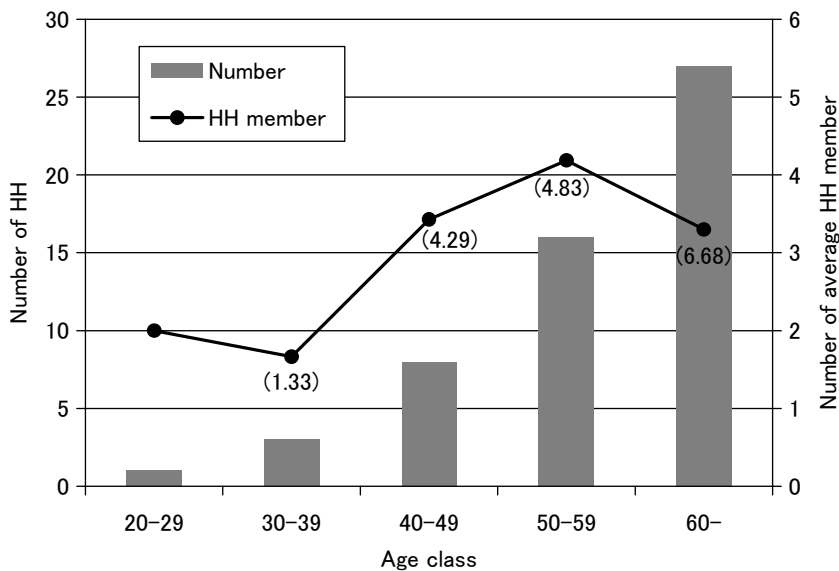


図-8 A集落における調査世帯の、世帯主年齢階層別世帯数と平均構成員(2009年9月)。括弧内の数値は分散を示す。

5.2 A集落の就労形態と観光

サンプル世帯の成人構成員134名から75歳以上の高齢者を除くと、122名となった。うち観光業を主たる収入源とするものが36名(29.5%)と最も多かった。

農業および主婦という回答者の平均年齢がそれぞれ55.4歳および55.1歳であるのに対し、会社員・公務員の平均年齢は33.8歳と、その他を除くともっとも若く、次いで観光業となっていた(表

ー5)。ビダユはもともと焼畑農耕民であったが、都市化に向けて社会が変化している様が、A集落からもうかがえた。

表ー5 サンプル世帯の成人構成員の職業別人数および平均年齢（2009年8月）

	職 業	人数 (%)	平均年齢*
観光業	ボルネオハイランド	10 (8.2)	39.9
	集落内観光	26 (21.3)	45.7
小 計		36 (29.5)	44.1
	会社員・公務員	20 (16.4)	33.8
	農 業	21 (17.2)	55.4
	主 婦	24 (19.7)	55.1
	そ の 他	13 (10.7)	28.2
	退 職	8 (6.5)	61.8
計		122 (100.0)	45.2

* 18歳未満および75歳以上を除く。

観光業を主たる収入源とする36名のうち、10名がボルネオハイランドでゴルフ場の整備やホテルの受付、運転手などに従事していた。ボルネオハイランドはSmith (1989) のいうレクリエーション観光に相当する。A集落で行われる民族観光の従事者と比較して分散に差がみられるかを、年齢および教育についてF検定を行ったところ、いずれも差がなかった。平均教育年数もそれぞれ8.0年および7.8年とほぼ同じであったが、平均年齢は36.9歳および44.2歳で、集落観光には相対的に高齢の人々が従事していた。

集落観光にかかわる就労形態の内訳は、民宿経営、ガイド、インフォメーションセンター勤務、ダンサー、賄い、土産物販売、旅行代理店の現地スタッフ、温泉経営など多様であった。観光客と直接接するため、全員が英語を話した。比較的従事者の多い民宿経営（7名）およびガイド（5名）を比較すると、前者が平均年齢48.4歳、子どもの手がかからなくなった女性が主に従事していたのに対し、後者は平均年齢35.2歳、都市部で働いた経験のある男性が従事していた。A集落の観光開発は、様々な就労形態を生み出しており、一部は若年層の雇用にもつながっていることがうかがえた。

5.3 観光開発に対する住民の意識

20日足らずの間に22ヵ国、100グループ（426名）が訪れたことからわかるように、観光シーズンの、とくに週末は大勢の観光客がA集落を訪れ、軒先を散策し、ロングハウスの中を覗く。そのことをどう考えるかという質問に対し、55名の回答者のうち、94.5%はかまわないと答えた。2名だけが不快とし、理由として観光客のマナーが悪い、村人の断りなしにふるまうという点をあげた。かまわないとした人々の理由は、52.7%が逆に観光客を見物する楽しみや文化交流をあげていた（写真ー2）。34.5%は収入源を理由とした。



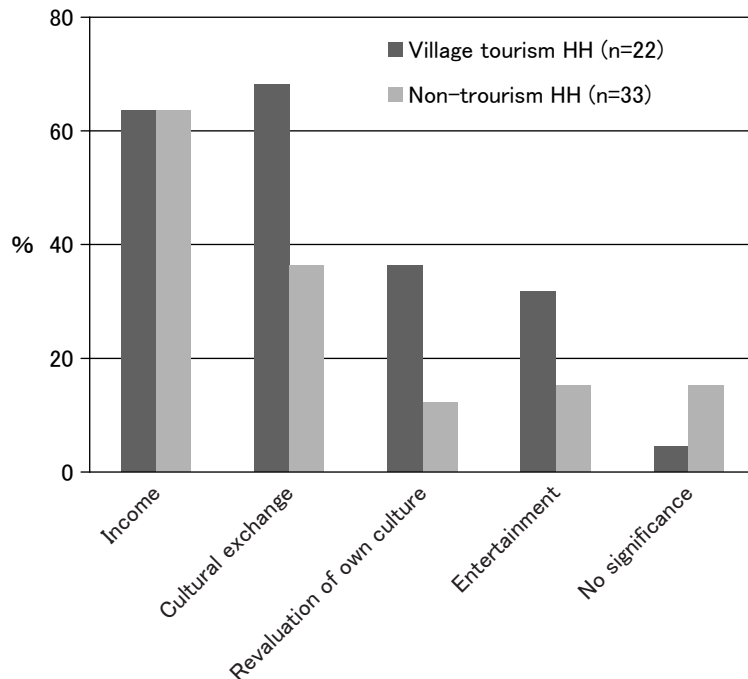
写真-2 伝統楽器の演奏を試みる観光客（2009年8月，著者撮影）。

観光客の数に対しても、多くの回答者がもっと増えてもよいとし、現状維持と合わせると80.0%にのぼった。減らすべきと答えたのは3名にすぎず、うち1名は外国の美男美女をながめるのは楽しいが、同国人の観光客はもっと減ってほしいと答えた。

アンケート回答者の84名がA集落訪問の目的に掲げ、97名が行ったと回答したロングハウス観光に関連して、住民自身が伝統的なライフスタイルを好んでいるかとを質問したところ、53名（96.4%）が好んでいた。うち1名は、近代化された暮らしと伝統のどちらも好むと回答した。しかし観光客は何に魅力を感じて集落を訪れるのかという問いに対しては、6名（10.9%）がわからないと答えた。うち1名は、旅行会社が勝手に連れてくるだけだと述べた。集落の魅力として予め設けた選択肢から選ばれたのは、家屋（63.6%）、文化（56.4%）、自然（20.0%）であり、ホスピタリティーと回答したものは3名にすぎなかった（複数回答）。観光客側からみると、ホスピタリティーがもっとも評価が高かったのとは逆の結果になった。

家屋という回答の中には、ロングハウスではなく敢えて首級の保管所をあげた回答者が4名いた。実際、観光客は集落入り口に設けられた駐車場に着くと、まずインフォメーションセンターで入村料を払い、高床式のロングハウスの前庭に上がる。次に案内されるのが、観光資源として再建された首級保管所であるが、室内の中央に集められたかつてのヘッドハンティングの名残に対し、多くは離れたところから一瞥するだけで立ち去る。ボルネオ先住民＝ヘッドハンターという先入観は、住民自ら抱いているほどには、観光客の間では重視されていないといえる。また、魅力にジャングルトレッキングをあげた住民も4名いたが、これも観光客の間では人気のない活動である。

調査対象世帯を、集落観光に従事している構成員がいる世帯（22）といない世帯（33）で分けて比較すると、集落に多くの観光客が訪れることについての感想には差が認められず、いずれも約半数が、観光客を見物するだけのかかわりも含め、文化交流を楽しんでいた。また3分の1が経済効果をあげた。しかしツーリズムの意義については、観光業に従事している世帯としない世帯に差がみられ、従事世帯の方が文化的な意義を認めていた。集落における単調な生活にとって、よい気晴らしになるという回答も、観光業従事世帯の方が高かった（図－9）。観光に関わる設問の大半に否定的であった回答者は、いずれも非従事世帯であった。



図－9 観光の重要性に関する回答者の見解（複数回答）。構成員に集落内観光従事者がいる世帯としない世帯で分けた。

A集落の観光開発は成功しているかどうかという質問に対して、「成功」と答えた回答者は他の設問に較べると少なく、観光業従事世帯では77.3%、非従事世帯では63.6%であった。「成功していない」という回答は、非従事世帯に3名みられ、入村料分配の透明性に疑問を呈していた。「成功」という回答者の中にも、より多くの活動の導入、運営体制の改善、若年層のとりこみの必要性という意見があった。

6 考察

A集落の観光開発は、住民が主体となって推進してきたという点では、CBTの成功例ととらえることができる。バリオの観光開発（加藤ら，2004）も、自然資源とロングハウスという民族

文化を組み合わせたCBTであったが、広大なケラビット高原に人口が分散しており、陸路もないという立地条件が観光のあり方を規定していた。

対するA集落は、州都から車で1時間というめぐまれた立地にあり、JKKKという地域組織が集落レベルの観光行政を担っていた。しかし調査時は政治的な対立によりJKKKの構成員が入れ替わったばかりであり、大半の質問に対して否定的な回答をする一部の住民の背景にはそれに起因する不満があった。Xu et al. (2009) が指摘したように、観光収入の増大が社会の対立に転じることを防ぐために、適宜行政が介入することによって、金銭の動きの透明化や分配方法の制度化をすすめる必要があると考える。

こうした集落の内情とは関わりなく観光客は順調に増え、調査を行った夏季にはひきもきらず訪問者があり、マスツーリズムの様相を呈していた。しかしビダユの観光資源とは何かを考えると、もともと焼畑農耕民であったビダユの民族文化とは、本来農耕を核とした生活文化であったはずである。一方、調査対象とした55世帯のうち、農耕に従事していた世帯はわずか21世帯であり、そのうち14世帯は観光業などとの兼業であった。伝統的な農具は展示品となり、名称を尋ねても人々の間で答えは一致しなかった。焼畑の衰退は集落をとりまく森林資源の回復を促し、集落の視覚的価値を高めるという効果をもたらしていた。

多くの日帰り観光客は竹の前庭を歩き、ガイドの説明に耳を傾け、頭骨などの展示品をみたあと、土産物を購入する。土産物の多くはクチンで仕入れてきたものである。時間に余裕があれば、昼食をとったり、河原の温泉に立ち寄ったりもする。すなわち、A集落の観光資源は、人々の生活や文化というよりもむしろサラワク文化村のようなテーマパークに近い、演出された生活文化であるといえよう。観光客はその差を問題視することなく、集落内を一巡して立ち去ってゆく。すでにライフスタイルを変えた集落の住民自らがその演出を行っているところが、バタンアイとは異なる点である。

住民自らが生活文化を演出し、就労機会を創出しているため、観光業の現状についても、観光客の数を減らす必要があると回答したのは、観光とのかかわりが少ない世帯の中の2世帯だけであった。72.7%の住民がいわゆる観光客数の増加をのぞみ、現状維持も含めると8割に達した。自らウェブサイトを開設しているA夫妻は、公務員を退職してクチンで暮らしていたが、退屈の余り出身地のA集落に戻り、生計のためというよりむしろ生きがいのために、ホームステイと土産物販売を行っていた。

A集落においてもっとも特徴的な結果は、見られる側である住民が、観光客を見ることを楽しんでいるという、ホストとゲストの倒置である。訪れる観光客はさまざま国籍を有しており、英語でコミュニケーションできない住民も観光客を眺め、観光客がA集落を楽しんでいる様子を見て楽しむという、双方の娯楽として機能していた。したがって観光客が地域社会に入りこむことによって、生活が脅かされるという不満や不安(Yea, 2002; 加藤ら, 2004)は、A集落ではほとんど認められず、多くの住民が観光を文化交流の機会と捉えていた。

観光開発は、都市近郊という立地ゆえ早期に変容を遂げた生活文化の再興や再認識につながったと考えられる。しかしそれは観光を介してのみ実現する伝統回帰であり、観光を内部化した新

たな生活文化を見出しつつあるといえよう。観光客の増加は、収入源だけでなく自らが楽しむ機会が増えることを意味する。ホームステイは、観光客にとって異質性を堪能することのできる機会であり、住民にとっては観光客とより長く関わる機会である。双方の側からホームステイの促進が要望され、また観光客のA集落に対する評価も滞在を通して高まっていた。

謝辞

本研究は、サラワク開発研究所 (Sarawak Development Institute, SDI) およびサラワク州計画局 (Sarawak Planning Unit, SPU) の許可のもと実施した。とくにSDIのLelia Sim Ah Hua氏およびSPUのKhuraiza Binti Ibrahim氏には、様々な便宜をはかっていただいた。MUDTおよびSTBの方々、ならびにプンフルのPeter ak Angom氏は快く資料や情報を提供してくださった。マレーシア国立大学の齋藤達也氏、INSAR Tourの酒井和枝氏、および筑波大学生命環境科学研究科の水越健介氏には調査地を選定する際に貴重な助言をいただいた。A集落の住民の方々は長時間にわたるインタビューに応じてくださり、調査期間にA集落を訪れた観光客の方々のすべてが快くアンケートに協力してくださった。その他本研究に協力してくださったすべての方々に、この場を借りて心より感謝したい。

引用文献

- Chambers, E. (2001) *Native tours: the anthropology of travel and tourism*. 2nd Edition. Waveland Press, Long Grove.
- Forest Department Sarawak (2010) *Constituted national parks*. <http://www.forestry.sarawak.gov.my/> (browsed on November 13, 2010).
- Geddes, W. R. (1954) *The Land Dayaks of Sarawak*. Colonial Office, London.
- Graburn, N. H. H. (1989) Tourism: the sacred journey. In Smith, V. L. (ed.) *Hosts and guests: the anthropology of tourism*. 2nd edition. University of Pennsylvania Press, Philadelphia. 21-36.
- Hamzah, A. (2004) Policy and planning of the tourism industry in Malaysia. Proceedings of the 6th. ADRF General Meeting, 2004 Bangkok, Thailand. Bangkok.
- 稲垣勉 (2001) 観光消費. 岡本伸之 (編) *観光学入門: ポストマツーツリズムの観光学*. 有斐閣, 東京. 236-262.
- Kahn, J. S. (1997) Culturalizing Malaysia: globalism, tourism, heritage, and the city in Georgetown. In Piccard, M. and Wood, R. E. (eds.) *Tourism, ethnicity, and the state in Asian and Pacific societies*. University of Hawai'i Press, Honolulu. 99-126.
- 加藤亮, 齋藤達也, 増田美砂 (2004) ボルネオ奥地における観光開発の可能性: サラワク州バリオを事例として. *筑波大学演習林報告*20:60-99.

- 河村誠治 (2000) *観光経済学の原理と応用*. 九州大学出版会, 福岡.
- Mamit, D. J., Sarok, A. A. and Amin, N. (2003) *Creating a new Bidayuh identity*. Dayak Bidayuh National Association, Kuching.
- MinTH, Sarawak (2010) *Sarawak tourist arrival*. <http://www.mudtour.sarawak.gov.my/modules/web/> (browsed on October 6, 2010).
- MTPB (2010a) *Facts and figures*. <http://www.yourism.gov.my/corporate/research.asp> (browsed on November 15, 2010).
- MTPB (2010b) *Media release*. <http://www.yourism.gov.my/corporate/mediacentre.asp> (browsed on November 15, 2010).
- Nash, D. (1989) Tourism as a form of imperialism. In Smith, V. L. (ed.) *Hosts and guests: the anthropology of tourism*. 2nd edition. University of Pennsylvania Press, Philadelphia. 37-52.
- Nash, D. (1996) *Anthropology of tourism*. Elsevier Science, Oxford.
- Sarawak Government (2010) *Introduction: ethnic groups*. <http://www.sarawak.gov.my> (browsed on November 13, 2010).
- Smith, V. L. (1989) Introduction. In Smith, V. L. (ed.) In Smith, V. L. (ed.) *Hosts and guests: the anthropology of tourism*. 2nd edition. University of Pennsylvania Press, Philadelphia. 1-17.
- State Planning Unit (2010) *Sarawak: facts and figures 2010*. Kuching, State Planning Unit.
- STB (2010a) *Welcome to Sarawak*. <http://www.sarawaktourism.com/content.cfm/> (browsed on October 25, 2010).
- STB (2010b) *Trabel packages*. <http://www.sarawaktourism.com/p2g/> (browsed on November 9, 2010).
- 高寺奎一郎 (2004) *貧困克服のためのツーリズム : pro-poor tourism*. 古今書院, 東京.
- Wood, R. E. (1997) Tourism and the state: ethnic options and constructions of otherness. In Picard, M. and Woof, R. E. (eds.) *Tourism, ethnicity, and the state in Asian and Pacific societies*. University of Hawai'i Press, Honolulu. 1-34.
- WTO (2001) *East Asia and Pacific Tourism 2020 vision*, Vol.3.. WTO, Madrid.
- WTO (2002) *The World Ecotourism Summit: final report*. WTO, Madrid.
- WTO (2006) *Poverty alleviation through tourism: a compilation of good practices*. WTO, Madrid.
- WTO (2010) *About UNWTO: history*. <http://www.unwto.org> (browsed on October 1, 2010)
- Yea, S. (2002) On and off the ethnic tourism map in Southeast Asia: the case of Iban longhouse tourism, Sarawak, Malaysia. *Tourism Geographies* 4(2):173-194.
- Xu, H., Sofield, T. and Bao, J. (2009) Community tourism in Asia: an introduction. In WTO, *Tourism and community development: Asia practices*. 2nd Edition. WTO, Madrid. 1-17.

Summary

Tourism is a growing industry in the world. It is also expected to contribute economic conditions in developing countries because large-scale investments and highly developed technologies are not always required. To avoid negative impacts on local environments and societies, Community Based Tourism (CBT) is advocated by WTO as an alternative, in which share and participation play important roles. However, whether a dilemma in low negative impact but low output in elite tourism, or contrary high input but high negative output in mass tourism can be solved through CBT is not clearly discussed.

Malaysia is one of the countries encourage tourism. Of the three regions forming Malaysia, Sarawak is endowed with still intact nature and the culture of various ethnic groups. The State Tourism Board put an emphasis on cultural tourism, but actually only limited number of settlements are listed as tourists' destinations. We focused on one of them, a Bidayuh settlement (hereafter A settlement), distributed questionnaires to tourists visited A settlement, and interviewed to the people from July to August 2009.

Tourism resource of A settlement was, above all, the stilt houses connected each other around a longhouse with terraces made of bamboo (*tanju*). Due to the location of an hour drive from Kuching, 83 % of the tourists made a day trip. The main objective was the longhouse and culture. The majorities in the nationality were European (56 %) and Malaysian (21 %) but the others varied including Oceania, North America and Africa. They were mostly satisfied with the hospitality and culture.

The people have maintained the settlement and improved it since the 1980s. Easily decayed bamboo stilts were replaced with iron wood under the government support. With establishment of information center and public restroom, people started to charge admission to the settlement. Despite a raise in the admission, the number of tourists had ever been increasing. Renovation is still continued like establishment of a house to gather skulls as a memento of head-hunting days and opening of souvenir shops. Their opinion on the number of tourists was to be increased and few had negative perceptions on the tourism and tourists.

The characteristics of the tourism at A village could be found in the autonomous decision-making and inversion in the host-guest relation. People, including the majority who did not have direct commitment in tourism, enjoyed watching guests from every part of the world, and in this point we could find a new type of tourism development with interactive role: tourists to see and to be seen, and likewise the people to be seen and to see. Ethnic tourism staged by the people themselves is one of the conditions to make mass tourism and people's daily life compatible.

(2011年2月8日 受理)